

未来の名匠

平成22年度から伝統産業中堅技術者の中でも特に技術に優れ、今後の伝統産業を牽引する意欲のある職人を、京都市伝統産業「未来の名匠」に認定しています。今年度新たに認定された8名の「未来の名匠」による技と美の作品展示会をお楽しみください。



いのうえ としひこ
井上 利彦 (京表具)
井上光薫堂

作品 ふろさきびょうぶ
風炉先屏風

何かと約束事の多い茶道具、風炉先屏風の伝統的なカタチに金銀細工の絹本、赤溜漆塗りの縁、流線隈金具、裏には七宝の引手をあしらうなど今様のカッコイイを演出。京表具のDNAを受け継ぎながら、自分流にその遺伝子を組み換え次代に伝えていきたい。



ほつ た もとゆき
堀田 基行 (京友禅)
有限会社 和晃苑

作品 かたゆうぜんぞめ こもん さくらなが
型友禅染 小紋「桜流し」

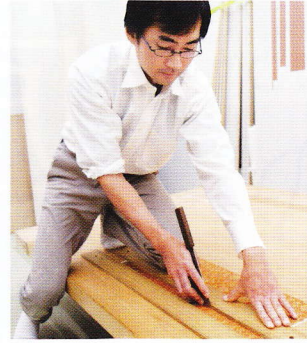
型友禅の伝統的技法である摺り友禅と写し友禅で染め上げた着尺。渦を摺り友禅の技法を用いて味のある表現に、写し友禅の技法で花卉の柄を糊置きすることで全体を引き締め、立体感を演出。洒落感のある古典的な柄に、モダンな要素を加えた作品にした。



うちだ かくいち
打田 学市 (京漬物)
打田漬物商工業株式会社

作品 きょうつけもの
京漬物

“漬物は生きている”
畑と向き合うと水も土ももちろん野菜も生きている。日々野菜と向き合い実際に触れてみるとその日の野菜にあった塩加減や重石のかけ具合が決まる。京漬物の旬を食べていただきたい。手塩にかけて漬けました。



まつだ かずたか
松田 一貴 (京表具)
株式会社藤岡光影堂

作品 でんみんちやうひつ だるまざ
伝明兆筆「達磨図」

表具師は掛軸や建具を仕立てる事はもちろん、修理する仕事もある。傷みの原因を見極め、取り除き、永らく保存できるようにする。古い絹本の作品には劣化させた絹で補修を施し、裏打を取り替えて修理する。100年後を想像しながら伝統的材料、伝統的技術により修理が繰り返され、作品は未来に伝えられる。



しげの やすまさ
重野 泰正 (京鹿の子絞)
眞桜(まお)

作品 わちやうどひん がっさいぶくろ うちわ
倭の調度品 合切袋・団扇

千数百余年の時代から受け継がれて来た伝統技、京鹿の子絞の手法の一つである傘巻き上げ絞り、武具や甲冑にも用いられていることでも知られている鹿革を素材の一つ一つ括り上げ、麴塵染めによる色合いの変化と絞り独特の隆起で表現、倭の調度品に仕上げた。絞り一つ一つの異なる表情に趣を感じて頂きたい。



まつやま いっせい
松山 一成 (浸染)
松山染工

作品 ねりたてぬれぬきせいごう ひぞ
練経濡緯精好 緋染め

練経濡緯精好の緋染めは、宮廷装束 十二単の袴となる生地である。この生地は、経糸と緯糸の染色性が異なり通常の染め方では色濃度に差が生じる為目的の鮮やかな色が得られない。そのため生地に前処理を施し、鮮明で透明感のある緋色へと染め上げた。



すがまた ちえ
菅又 千恵 (京仏具)
須藤光昭工房

作品 にてんのうぞう
二天王像

興福寺にある二天像の掛軸を参考にしている。右が増長天、左が持国天。材は楠で、一本造りという一本の木から彫り出す技法で製作した。首はあえてさし首にし、体内を少しでも空洞にする事で木材の割れを防いでいる。二天像に向かって風が荒々しく吹き荒れる様子を表現した。



わく なみ
涌波 まどか (京焼・清水焼)
蘇嶽窯

作品 せいじとびかんかさ ばち
青瓷飛鉤重ね鉢

練り込み青磁の生地に飛鉤(鉤の刃先を用い連続した削り目をつける技法)を施した重ね鉢。縁には紅をあしらひ緊張感を持たせ、深い青磁の色の中にさりげない文様が浮かび上がっている。収納してもかさばらず、使っても重ねた状態でも美しいフォルムを心掛けた。